

嶺上の強風

直截一線の急降坂

ギルギス  
チヤンガ  
ル

灌木「コ  
パ  
ル  
ゴン」

エンギ嶺は其高さ幾許なるを知らず、之を前者アツコラム嶺に比すれば、高く且つ峻、惟ふに其絶頂は、約一萬五千尺を下らざるべく、千山來り朝し、萬嶽其の麓に伏す。轟々半空に聳へて、而も道路上礫石狼藉顛倒せんとするもの幾回なるを知らず。空氣は稀薄にして呼吸に悩む、況んや嶺上風あるを常とするに、是日は西北の風強く吹き荒みて今にも呼吸全く塞り、忽ち閉息せんとするの感あり。啻に閉塞せんとするのみならず、心緩めば人も馬も吹き浚はれんとするの恐れ有り。人々相戒め、或は匍匐し或は休止し、辛うじて嶺頂を越え畢るや、風力大に其の威を減せしも、この度は直截一線の急降坂、又惴々として顛倒せんとすること幾數回、足を置く毎に必ず自ら踏み固め而して後ち敢て歩を移すもの、蓋し該嶺跋涉の實況とす。

#### 八 瘴惡の山鴉

二十六日氣温は午前二十六度、午後は四十八度を示せり。午前八時四十分出發行程約十里、午後三時ギルギスチヤンガルに到る。但し昨日迄は、始終南方を指せしも、本日より左折東行すること、爲りて葉爾羌河の上流を溯る水深膝を越えず河岸には例の生木の儘焚き得べき「ユルゴン」即ち紅柳と同質の灌木「バルゴン」と稱